

北越雪譜 二冊 全

農商務省
圖書
號册
十二
共五

大政官文庫
和書門
一三六〇
冊架函號

內閣文庫
和
一一六
七冊
五函

內閣文庫	
番號	和 11160
冊數	7 (6)
函號	175 80



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



北越雪譜後編三卷

越後 鈴木牧之編撰 京水百鶴画圖

右前編ふりて雪の中神社の祭事佛閣の法會民間の行事
大小雪車の制作用状雪中種々の奇談珍説を記し雪の消終る
もをを圖ふわへ北越の雪中を目前に視る如き書也

骨董集二編

上帙二卷 下帙二卷

醒齋京傳先生遺稿 京山人百樹翁補訂

右舊板曾て本舖ふ購し得る由多京山翁ふ乞ふを醒齋先生
の遺稿を索め翁正し補訂を下し之以上梓せ

女粧考

五卷

京山人百樹編

上古より近古までの女の風俗の古圖をのせ古書を引く其風俗の
沿革を考へ鏡櫛ををりめり女の容飾の道具るるべふ髮脂
白粉の始原眉を拂ふ夏鍍漿をつける事のもの其譯説を
まへて女の風俗に係りたる事をのりまを記せり

北越雪譜二編三卷

明治九年購求

目錄

- 鳥追櫓 順列上下小
- 地獄谷の火
- 無縫塔
- 辛賀の哥
- 菅神御傳畧
- 異獸
- 智法印
- 浮嶋
- 美人

- 雪霜
- 越後の人物
- 北高和尚
- 逃入村の不思議
- 田代の七ツ釜
- 火浣布
- 土中の舟
- 兩頭の蛇
- 石打明神
- 蛾眉山下の標準

雪譜二編卷之下

目 文英堂藏

○ 苗場山

○ 鶴恩小報也

○ 三四月の雪

通計二十三條

右異獸より以下分けて四の巻とす

北越雪譜二編卷三

越後 鈴木牧之 編選

江戸 京山人百樹 増修

○ 鳥追櫓

農家中正月の行事小鳥追といふ事あり此事諸國よりもあまふ其あを処其国小よりてさぬぐる事ハ諸書小散見せり江戸の鳥追といふ非人の婦女音曲をるを女太夫とて木綿の衣服をうつくしく着あし顔化粧ひ編笠をかむり三弦小胡弓あどをあつせ賀唱をむりろくろくといひ門と小立子錢を乞ふ此事元日よりたどめ松の内をめぐりとも松をぎてもありく所もありとも我越後小正月の十五宵下をいふたどめ鳥追櫓とて去年より取除ききたる山を雪の上小雪を以て高さ八九尺あるひ一丈余も高さ小

應^おし^ま末^{のり}を廣^{ひろ}く雪^{ゆき}の^せ槽^{たね}を築^つ立^たて^る不^ふ登^{のぼ}る^べぎ^だ階^かを^も雪^{ゆき}の^せ作^{つく}り^頂を^へ平^{ひら}坦^{たん}小^この^り松^{しょう}竹^{ちく}を^し四^よ隅^ぐ小^この^り立^たて^る張^{はり}り^てを^も廣^{ひろ}く^心内^{うち}
 小^この^り居^いる^べぎ^だ中^{ちゆう}の^り小^この^り物^{もの}を^く喰^くひ
 ろ^ろの^り遊^{あそ}び^鳥追^お哥^かを^うて^るの^り一^{いつ}つ^の小^この^りあ^あの^りや^やど^どの^りあ^あの^りて^き
 信^{しん}懐^{くわい}の^りく^くの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^き
 早^{はや}苗^{なほ}田^{でん}の^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^き
 あ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^き
 此^この^り雪^{ゆき}の^り棚^{たね}小^この^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^き
 暖^ぬ国^{くに}の^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^き
 堂^{どう}を^もて^るて^るあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^き

○雪霜

前^{まへ}の^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^き
 中^{ちゆう}の^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^き
 冬^{ふゆ}を^もて^るあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^き
 人^{ひと}の^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^き
 時^{とき}の^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^き
 山^{さん}の^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^きの^りあ^あの^りて^き

○地獄谷の火

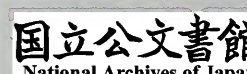
雪三詩二紙 卷之下

二

文英堂藏

此書の前編上の巻雪中の火といふ条小六日町の郡魚沼西の山手小
地中より火の燃事燃事をあるせしが地獄谷の火の更をいへり
あふ小なる火。おとて我越後小名高く七不思議小かぞへり蒲原郡
如法寺村百姓七兵衛孫六が家小あり地中より燃事火ハ普く
人の知所あるごとく其火より盛太ありハ魚沼郡のちちの小千
谷の在地獄谷の火あり唐土小是を火井といふ近來此地獄谷小家
を作り地火を以て湯を燂客を待り浴さしむ夏秋のそとめ
すべハ遊客多し此火井他国中あききききとて越後小多し先年蒲
原郡の内或家あやあり井を掘し其夜医師來りて井を掘し更
を聞家小飯時挑灯を井の中へ入るとのありしめく井を見と立
きりし井中より俄小火をいげ火勢きん小燃あがりけき近
隣のものども火事ありとてそをせつけ井中より火のものを

此井を掘しゆゑ此火ありとて村のものども口く小主人を罵り恨
けと主人も此火をおそとて埋くるとぞ此地火一陰火といふもの
如法寺村の陰火も微風の氣いづこ小発燭の火をさせ風氣辛小應
て燃事陽火を得さし燃事寛文のむし右門が在如法寺村庭あり靴を
はくひする時より燃事いづこを前小い井中の火も医者が挑灯を
井の中へさげしゆゑこの陽火いづこいづこさるるごとくまた又頓城
郡の海辺小能生宿といふ北陸道の官路あり此宿より山手小入る更
二里をり小間瀬口といふ村ありこの農家小地火をいづこを更如法寺村
の地火小同トとむ此やより用水小いづこ所あり早のをりハ山小就
井を掘小堀く水を得る更ありある時井を掘く横小とり時穴の闇
きをてくそため小炬を用ひく小陽火を得る陰火忽ち狀あがり人更
ち為小焼死しけるそ是等の更どもをいひする小越後のうちあり地



火をいざと火脈の地多しといふと陽火を得どしと發せざるも多しと
る

百樹曰余小千谷小ありし時岩居余小地獄谷の火を見せんを
社友五人を伴ひ用意の酒食を笑奴二人小荷りり余京水と同
行十人小千谷ををるると西の方・新保村・菽川新田といふ村々
を歴く一宮といふ村のゆる山間の篆畦曲節に茲小抵る行程一里半
可あり是日こそ小快晴し村落の秋景百逞目を奪ふまで平山
一ッを踰る坡あり別地獄谷ゆるの徑あり坡の上より目を下せ
一ッの茅屋あり是本文小ゆる混堂あり人々坡の半小ゆるし時
茅屋の樓上小四五人の美婦ありとこのく檻小よりて遙小この
人々を指もあひあひ笑ひあひあひ名をよびあひあひ手をうちたさ
あひあ手をあげくまわく四面皆山ゆく老樹鬱然とて發翳塞の

中、小個美人を見ごと愕然し是狸小あつとんばうあつとんば
といひけり岩居友とらと相顧手を拍て笑ふこと小千谷の下と
町といふ所の酒樓小居る酌株の哥妓どもあり岩居朋友と計り
竊小此小招ききて余小貞さん為とぞ渠ハ狛小あつとんばと岩居
小魅ささといふあり已小地獄谷小より皆樓小のむより岩居ハ余と
京水とを伴ひてかの火を視せしむとそとく茲谷ハ山櫻多しり
ゆゑ櫻谷とよびるるを地火あるをりて四方五十歩六尺ををひききて
平坦の地とあり地火を借りて浴室とあり人の遊ぶ所とせしとぞ
櫻谷とよびるる処地火のたれ小地獄とよぶること花はささく
るぞり・さくとの火を視る小一ッの浅き井を作りたるその井中
より火の燃る事常の湯屋の火よりも盛なり上小釜あり一間
四方の湯槽あり細き竈ありと后の山の清水を引き湯槽小あり

と湯ハ槽の四方ハ溢さちつらとをりて此湯温くも熱くも
天工の地火盡す時あはれと人作の湯も盡す期あり見ふも清潔
ある事ありて此混堂小續さく厨処あり灶あり穴あり地
火を引く物を意薪小同ド次小中の間あり床の下より竹箆を出
し口六寸をり銅を鉗て火を出さしむ上より自在をさげ此火
小酒の烟をりあるハ茶を煎夜ハ燈火とをさえ熟此火を視ふ
箆をさるること一寸をりの上小燃る扇小あつげバ陽火のむと小
消る箆の口小手をあててさうむる少く風をうらるのそ数燭の
火を翳せば忽然とくもゆることとドめの如く主の翁が白の火
夜ハ昼よりも燥烈く人の顔青くもるとり翁が妻水のうら
よりのゆる火を見せやさんと混堂のうらる小僅の山田ある所
ふりり田の水の中少く湧きさうあるふつけぎの火をさうし

小水中の火蠟燭のゆらぐ如く老嫗がらく此火のやうゆる
処やあり夜ふらさくさく火をりやをのそ歎きさくさく
ゆり余が江戸の目くら視る所とく奇妙あり唐土ハ此火
を火井とく博物志或ハ瑯琊代醉小見えたる雲臺山の火井も
此地獄谷の火のごとくありて事ハ洪大なる此谷の火ハ勝らば
唐土と日本とをわらうる火井の最第一といふ是を見たる事
越遊の一奇観あり唐土ハ火井の在る所北の蜀地ハ属と日の本の
火井も北の越後小在り自然の地勢小ゆるやん・さて一人の
哥妓様上ふらさくさく小岩居を呼ぶとて樓小のやまり
余ハ京水とく小此湯小浴を樓上ハ早く三弦をひくせり浴
をりて樓小のむと既小杯盤狼藉たり婢娟哥妓袖をつく杯
素手弄糸朱唇謡曲迦陵頻伽の声外面如芥の色真を添まら

地獄谷遠然極樂世界とあり此妓どもを養ふ主人もあつた
 來り居る從つ料理人小具一なる魚菜を調味さへさつ小
 宴を聞く是主人俗中小雅を映ぐ恒小文人を推慕ゆあ小是
 日もつ小來りて余小面識なるを若居小約せりと此人觀る
 のも自ら双坡樓と家号をその滑稽比一をりて知るべし飄逸
 洒落ふくくよく人小愛せける家の前後小坡ありとを双坡の字
 下し得て妙あり双坡樓扇をゆげて余小句をむ小妓も持し
 扇を出て京水画をる一余即奥を書きこきを見く山石居を
 せしめあめく壁小句を題し更小風雅の奥をもちりりかて
 やり日も傾きけり六歸路を促しける小哥妓ども草鞋ゆり來
 りしとてそとるりぐのありこもあつたをさへてるを筆とあそ
 ぶきりづるも酔奥あまは噪鬧し途を行く細流あつた所小

りて紅唇粉面の哥妓紅視を裏へ渉る花姿柳腰の美人
 等しとて水をいへ水をこするも余が江戸の目小最珍らしく奥
 わり醉客らんくをうへバ酔妓歩く躍る古繩を蛇と一駭せむ
 とさへてる妓情しと片足泥田つとるしと一を衆人駭然を此
 途ハ凡て農業の通路あまは越え茶店もあつ半途小至りて
 古き社小入りてやせと一妓社の店小入りて立ちり石の水盤の
 沽る水を僅小掬手を洗ひし私小去りてあんとそのま樹下小
 立せ玉ふ石地藏芥の前小並びなちあつ懐中より鏡を出て鉛粉
 のとらとびつをづくの唇紅をさへて粧をさることこの粧具を
 りり石佛の頭小置く外面女芥内心如夜又のりまめあまは芥ハ
 あふとあひの玉あんとものさあ一日も已小下晡あれたあつゆを
 そめく小千谷つとるき
 此紀行別小一本あり吾々
 北越旅談小をさむ

正月鳥追櫓之図

圖中 山をあす所

皆 雪たのま



巖

新年都未芳

華二月初鷺見

身寄白雪如嫌

去冬晚在穿庭

樹化飛雪

涼仙舟 圖



○越後の人物

板額女いさぐらぎめ加治明神山かぢあけみんかみの城主きやうしゆ長太郎ながたろう祐森すけもりが室古志郡むろこしぐんの産あり又三
 歳の小児こゝろも知る酒頼童子しゆねどうしハ蒲原郡ははらげん沙子塚村さまごつらの産今猶屋敷跡いまなほやしきあと
 あり始はじめハ雲上山うんかみ国上寺くにがみでらの行法印ぎやうほふゑんの弟子でしあり玄翁げんそう和尚おんがうハ伊夜彦山いよひこさん
 の麓ふもと箭矧村やまきりむらの産あり近世ちかよ小こ徳僧とくそう高儒かうにゆう和哥わが書画しよゑの人ありいふ
 一もあつぎととも遠く四方ちゆうほう小雷こらい名なせもくは画人吳俊明のち江戸小近年相しやうねんさう
 撲ま小越海こしゑ鷺さぶ濱はまハ新あたら写なの産九枚龍くわいりゆうハ高田今町たかたけいままちの産関戸せきとハ次勇濱じゆうはまの産也
 常入とこぞゆゆ力士りきしの聞えありハ頭城郡かぶさきの中野善右門なかのぜんごもん立石村たちいしむらの長兵衛ながべゑ浦
 原郡うらは三条さんじょうの三五右門さんごごもん是等これら無双ぶさうの大力たからゆゆ人の知る所あり又鑑かん写な近ちかき
 横戸村よことむらの長徳寺ながとくでら谷根村やねむらの行光寺ぎやうこうでらも怪力あまのりきのきとえたり此人このひとハいづ
 も獨ひとり一ひと鐘かねを軽かろく掛かぎぎもるむらのかハ有あ一人ひとりあり又孝子かうしりハ
 ぢぢハ村上小次郎むらかみせうじらう新あたら発田はつでんの菊女きくめ頭城郡かぶさきの僧そう知良ちらう近ちかくハ三嶋郡さんしまぐん村田

村の百合女むらのはやひめ百姓伊兵衛ひやくしやういべゑ新あたら発田はつでん荒川あらかわ村門左門むらかどさだもん百姓ひやくしやう豆腐賣とうふうり春

松まつ兼かね松まつ蒲原郡ははらげん釈迦塚村しやくぢやうづかむら百姓新六ひやくしやうしんろくも孝子かうしの名一国ひとくにハ高たかかりき今

存在そんざいもるもありとやとや大おほ樹じゆ

百樹ももき曰いひ余われ越後えちご小こいいてて板額いさぐらありハ酒頼童子しゆねどうしの旧跡きうせきをもたたぐぐ新

写かをも一覽いちらんあり一名の聞えなみのきこる神佛かみぶつをもをもたたててままつつりり寺泊てらどまりのこる

順徳帝じゆんとくていの鳳跡ほうせき義経ぎけい夢窓むそう国師こくし法然ほふぜん上人じゆんじん日蓮にちれん上人じゆんじん為兼卿たかかねのうぢ遊女あそびめ初

君等きみらうの古跡こせきもたたぐぐももたたぐぐととわわりりハ小越後こしゑご小こ入いりりのち氣運きうん順じゆんを失

ハ年とし稍しやう儉けんハ穀こくの價ね日ひハ小躍こあつり人氣じんぎ穩うまああるる心こころ歸家きけハありと

風雅ふうがをうししああハ古跡こせきをも空くうハ過あまりり惟平ただひらハ旅人りよじんとありときき

ああびびるる文雅ぶんがの人ひとをも刺さ回まわりりハ今いま小遺こゐ感かんありあり嗟あは乎う年としの儉けん

せせハををいいらんらんせん

○無縫塔

蒲原郡村松より東一里來迎村小寺あり永谷寺といふ曹洞宗あり此寺の近く小川あり早出川といふ寺より八町をり下小觀音堂ありその下を流る所を東光が淵といふ永谷寺(入院の住職あり此淵)血脈を投げ入る事先例ありさて此永谷寺の住職遷化の前年此淵より墓の石ふる(ごま)圓き自然石を一つ岸小出を是を無縫塔と名づけつゝ此石出るとその翌年必死住職病死する事むりより今ふりて一度も違ひする事あり此墓石大小小より住職の心小應せぬ淵へ之せぶその夜淵逆浪し住職のこの石を淵小出たる事度あり先年凡僧ら小住職一此石を見て死を懼き出奔せし小翌年他国小ありて病死せしとをいふ小此淵小灵ありて天然の死を示をあるべし友人北洋主人蒲原郡見附の邊文をとりて件の寺を覽る話小本堂間口十間右小庫裏左小八間小五間の禅堂あり本堂小いり阪の左り小鐘樓あり禅堂のうらう小蓮池あり

上小坂あり登りて住職の墓所ありかの淵より出りて圓石を人作の石の臺の脚ありふのむと墓とと中央あるを関山とて左右小次第しと廿三基あり大なるハ徑り一尺二三寸をり八九寸六七寸ありあり大小ハ和尚の徳小應むといひつゝふとと臺の高さらつゞも一尺をりありと語らむとかの淵小灵ありといふありて永光寺のやとり小貴人何某住玉ひし小その内室色情の如く夫をうと東光が淵小身を沈め冤魂悪竜とありて人をあやしを永光寺の関山名をきてけちま血脈をりの淵小志つちて化度小玉ひしゆ名悪竜得脱ありその礼とてかの墓石を淵小いりて死期を示を是以今ふりても入院の時ハ淵小血脈を沈むと寺説ふつゝふとを○さてま我が隣國信濃も無縫塔の事あり近江の石亭が雲根志ふりて前編灵異之部信濃國高井郡法湯村横井温泉寺の前小星河と幅三町をりの大川

りあり香深の麻と見ゆる小血の痕のときり是を火車落とく
 宝物とくる由來いむり一 天正の頃雲洞庵十世北高和尚といひい
 学徳全備の尊者ゆくりあり其頃此寺小ちり三郎丸村の農家
 小死亡のりのあり小時一も冬の雪ありつぎ雪吹もやむりけり
 三四日ハ晴をもちて葬式をのち一ハ小晴ざりなむ強くいとも
 をあり且那寺のまは北高和尚をもち棺をいづ一親族はさくこ
 人々蓑笠小雪成あぎて送りゆくその雪途もや半小いりし時猛風
 俄小ちり黒雲空布満て闇夜のぞくつともろく火の玉飛来り
 棺の上小覆かり一火の中小尾ハあまたる稀有の大猫牙をもち
 鼻をもち棺を目づけくともんと人々こをを見く棺を捨あけり
 まろびつ逃まもふ北高和尚ハまろも懼るいりろく口小呪文を唱
 大声一喝一鉄如意を擧ぐ飛つく大猫の頭をうち玉ひ一ふかから

や破とらん血やどろり一衣をけり一 妖怪ハ立地小逃去りけ
 る風もや雪もをもちて事なく葬式をいともけり寺の
 旧記ハのときり此時めくるを火車の法衣を今ふつ
 百樹曰余越遊一塩澤小在一時牧之老人小伴とて雲洞庵小
 いり一里むり庵主小對話ありかの火車か一の袈裟といふ物
 その外の宝物古文書の類をも一覽せりいりあも大寺あり祈禱
 の二字を大書一なる堅額ハ 順徳院の震筆ありとて 佐渡(辻
 震筆)門前小直江山城守の制札あり放火私伐を禁むるの文あり
 庭中池のちり智勇の良将宇佐美駿河守又死の古墳在り一を
 先年牧之老人施主とて新小墓碑を建より不朽の善行也
 りいづ一 本文ハ火車といふハ所謂夜叉の夜叉の怪ハ
 唐土の書ありあも散見せり

○羊賀の哥

余六十一還曆の時年賀の書画を集む吾国いささあり諸国の文人
三都の名家妓女俳優來船清人の一絶をも得たりとる牧之小贈と
りひまをさるる一さるり人より人ふりて千餘幅ふむべり帖とほそ
藏をひらせ是を風入とさるる所鋪ふつぎたる坐しきの障子をむき
年賀の帖を披き並ぶる所へ友人來り年賀の作意書画の評
あどころのあつるをりし頃礼の夫婦軒下小我か里言ふ立けり吾が家
常小草鞋をつらむをさるる者小施をゆゑとをま錢をおこす
此頃礼の翁とさるる頃礼の帖を心あるさるる見られたる
云やうにおぼるる頃礼の腰をさ成申さんなんざう玉り
とのふも食のやうあつるさるる似氣あつたさるるのちがつらうと思ひ
あつる短尺さるるをさるるけさるる

三途川とて先(百年も君がむむひをさるりやさん

五放舎

とまろしうのあつたさるる頃礼の帖をさ成申さんなんざう玉り
趣向といひ頃礼の五放舎と戯まける名もあつらうと友人と俱ふ
うた威ト宿を施行せんゆゑのさるるせんあど友人もさるる
まをれと杖をさるるけさるるけさるるけさるるけさるるけさるる
あつたさるるけさるるけさるるけさるるけさるるけさるるけさるる

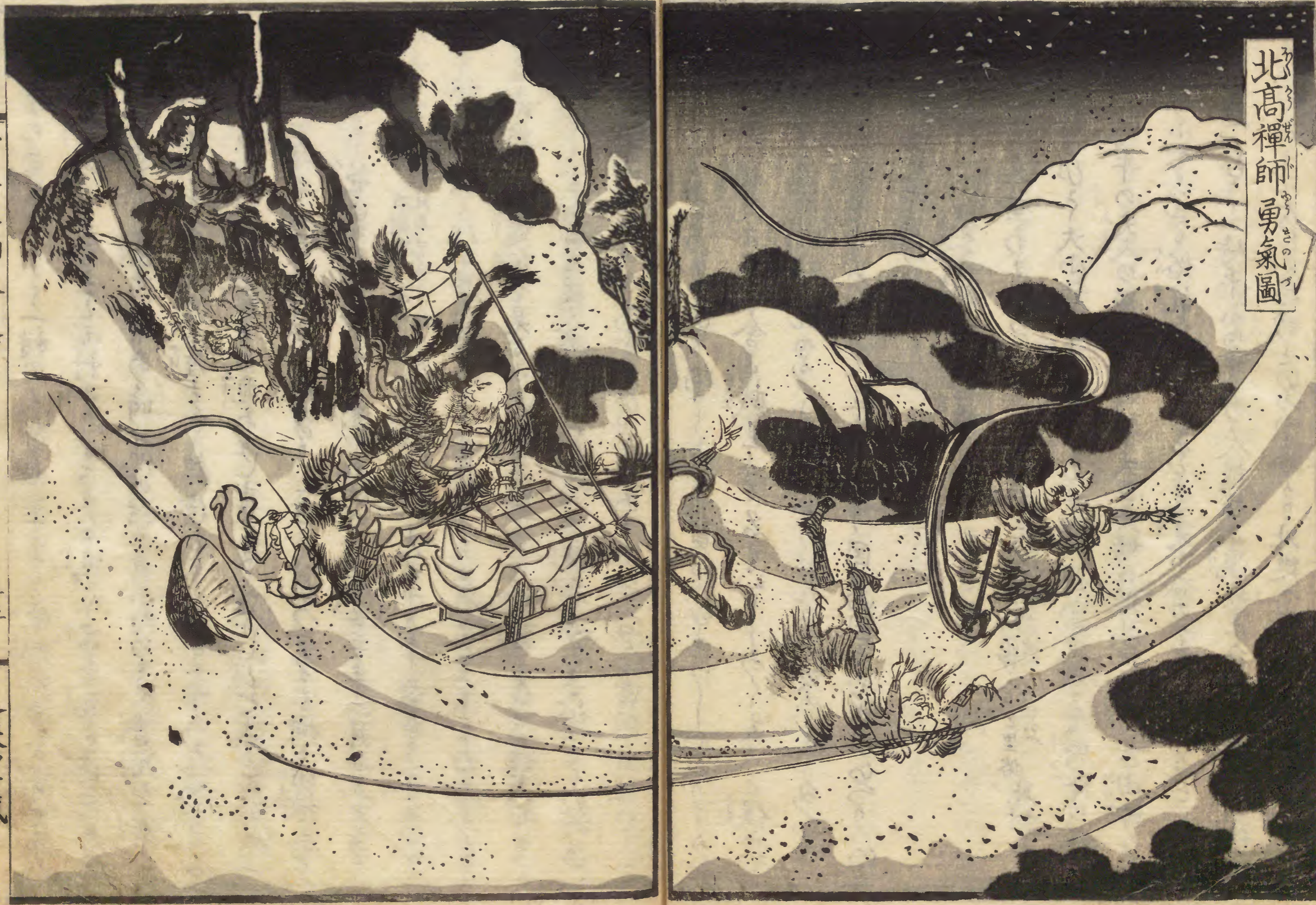
○逃入村の不思議

小千谷より一里あまりの山平小逃入村といふあり此村小大
塚小塚とよびく大小二ツの古墳双びあり所の傳ふ大あるを時平の塚と
小あるを時平の夫人の塚といふ時平大臣夫婦の塚此地小在(き由縁あり
こと論小むむる俗説ありあつたさるる愛小一ツの不思議ありとのふ
さるるむむむ時平小ゆりの人越後小流さるるあどて此地小終り
さるるあらんとの不思議といふ昔より此逃入村の人手習をさるる

北高禪師勇氣圖

北高禪師勇氣圖

文溪堂藏



五言二編卷之六

十三

文溪堂藏

天満宮の崇ありとて一村の人皆無筆あり他郷小身を寄て手習
 せむべ崇ありとて一村の人皆無筆あり他郷小身を寄て手習
 とあるこのゆゑ小文字の用ある時ハ他の村の者小たのて書用を毎
 又此村の子どもとて江戸土産とて錦繪をゆひする中ハ天満宮の繪
 わまばうのてを神の崇りの兆ありし事度くありしとてさまばうの大
 塚小塚を時平大臣夫婦の古墳ありと古くはいつても何れ由縁あり
 事ありて一管家の筑紫ゆゑ薨ト玉ひするハ延喜三年二月廿五日あり
 今を去る事百樹曰く今といひハ牧之老人が此まがき一なる文政三年をいふあり九百十五年前あり今ふり
 ても神天の明きたる事ありて一尊むとて一さて又とてふるのま事
 あり南谿が東遊記を見り小南谿東遊一津輕小居る時六七日も
 風雨づき一うち所の役人丹後の人や居ると旅店毎ふさび一たづ
 ゆゑ南谿あはふそのゆゑを問ひけまばあどいりや當国岩城ハ人の

ありする安壽姫對王丸の生国ありまばむりの人此御あつてを岩城山
 の神小まつりて社今小在り此兄弟丹後小まよひ三庄太夫が為小困苦
 するゆゑ小丹後の人をいさきてひ丹後の人此国小入とばるる大風雨有て
 日をこする事むりよりの事あり丹後の人此国の場をいづる風雨なら
 まらむゆゑ小丹後の人や居ると搜まありとありと南谿子此事小過
 たりとて記せり右小兄弟の父岩城判官正氏在京の時諺小あひそ
 家の言ひするハ永保年中の事あり今をさる事ありそ七百五十余年之
 兄弟の怨魂今小消滅せざる事人知を以論百樹曰安壽對王丸妻あは塩尻世巻小あり於考
 西遊記前編景清が塚ハ日向小あり世の知る処あり其母の塚ハ肥後国末麻
 の人吉の城下より五六里ほど東切幡村小まつり此所小景清が娘の墳も
 あり一村の氏神小まつり此村まらば盲人を忌む盲人他処より入る
 必崇あり景清後小盲人小ありしゆゑ母の冥盲人を嫌ると所の人の

ありト記せりことこの夏逃入村の不思議小類せりありことこの件
 二ハ社ありて丹後の人を忌墓ありて盲人をきらふあり逃入村と
 墳あるゆゑ天満宮の神霊此地を忌玉ふらんをもの考ふるふ
 かの古墳いよ時平が血脉の人ありて
 百樹曰余越遊りて小千谷に在りて時所の人逃入村の事を語
 りてこの古墳を見玉ふ案内を告ぐといひて管神のいよ玉ふ
 所(文墨の者強きゆ)きふもあはれ話をつてのいよゆ
 ぎりきさて天神様といふ三歳の小鬼も尊び時平ときげん此
 御神を諺言したる悪人ありとて其悪千古上下して哥舞妓
 狂言の作りたり婦女子も普く知る所とて童稚女子ハその
 實跡を志するが稀ありささぶかふるそらあり冊子小此
 御神の事を記さるいよまかといへど逃入村の因ふよりてふ

書載

○謹心案る小菅原の本姓ハ土師ありて土師の古人といひて
 先仁帝の御時大和国菅原といふ所小住するゆゑ土師の姓を菅
 原小改らる管神御名ハ道實字ハ三童名を阿呼とやたてまつる
 余が考あれども支仁明帝小仕玉ひたる文章博士参議是善卿の第三の
 長は是と云ふそと仁明帝小仕玉ひたる文章博士参議是善卿の第三の
 御子兼和十二年小生と玉ひり七歳の時紅梅を御覧とて梅の花
 紅脂のいろを似する哉阿古が類やもねづりけり十一の春齊衡父君
 より月下梅といふ詩の題を玉ひる時即坐小月輝如晴雪梅花似
 照星可憐金鏡轉庭上玉房馨 御祖父公御父卿の学業
 を受嗣玉ひて文藝ハさるの武事ゆも疎く志ましくなり
 ○清和天皇の貞観元年御年十五ゆ御元服同四年文章生小
 拳ら邑下野の権掾なるせらる同十四年御年廿八御母伴氏身

まろり玉ひ陽成天皇の元慶四年八月晦日御父是善卿も身まろり
 玉御年九此時 管神ハ御年四十一あり寛平四年御年四十八
 類聚国史二百巻を撰玉ふ和哥ハ管家御集一卷詩文ハ管家文章
 十二巻同後草一卷後草ハ筑紫今も世ふ傳ふ大納言公任卿ハ詠集ハ
 入とくとく管家の詩ハ「送春不用動舟車 唯別殘鶯与落花
 若使韶光知我意 今宵旅宿在詩家」此御作ハ 延喜帝ハまご
 東宮より時令旨あり一時の間ハ十首の詩を作り玉ひ其ハ
 あり〇さ御若年より數階を歴ひ後寛平九年御年五十三
 權大納言右〇將を兼ら此時時平大納言ハ任せ左〇將を兼
 管神と並び立く執政なり此時大臣の官ありゆ大納言ハ執政
 あり此年七月三日 宇多帝御位を太子敦仁親王ハ讓り玉ひ朱雀
 院ハ入らせ玉ひ亭子院ト奉り御法体ありと 寛平法皇トと

中奉る 敦仁親王を醍醐天皇ト後よりハ延喜帝ト奉る
御年十三 年号を昌泰ト改元を同二年時平公左〇臣 管神右〇臣
 相俱小 帝を補佐ハ奉ら時ハ時平公二十七 管神五十四兩公
 左右の〇臣ハまごも才徳年齡双璧をあび故小心詭詰ハ相
 和せま是 管神の諛毒を得玉ふの張本あり〇まごハ時平公ハ
 大職冠九代の孫照宣公の嫡男ハ代ハ臣の家柄なりありと
 ありと 延喜帝の皇后の兄ありとゆゑま若年ハ臣の貴
 重小職ハしあり此人の乱行の二ツを言ハ叔父ハ大納言国經卿ハ年
 老叔母ハ北の方ハ年若く業平の孫女ハ絶世の美人あり時平
 是ハ小意ハま夫人ハま夫の老ハを嫌ハの心あり時平或日国經の
 許ハ宴ハ醉ハ真ハまま夫人を貫ハんとひハを国經ハ醉
 戲言ハまひりハさハ国經ハ醉ハ醉ハるを見ハ叔

母を車小いご入さくさくつり母腹小生さくを中納言教忠といふ
 時平の不道此一を以て其餘を知るべしかろ不道の人あり
 寛平法皇の御父の御心少時平の任を除き管神御一人小国政
 をまろせ玉んとのむがりありあり小延喜元年正月二言
 帝亭子院へ朝覲のをりり御内心を示し玉ひふ帝も六
 とふさか玉ひ其日管神を亭子院めりり事のようにを
 内勅ありふ管神固辞しなむふ許し玉ひざりけり
 同月七日後二比密事いふいり時平公の聞ふ事いふ事先
 帝小説さるやうの君の御弟齊世親王八道實の女を空
 通い電遇厚し是以君を祭り親王を立国柄を一人の手
 小握んとの密謀あり法皇も是小應下玉あの風説ありと
 言を巧小説しけり時小延喜帝御年十七あり皇太后ハ

時平公の妹あり内外より讒毒を流し若帝の御心を動し
 奉りりあり○さく時平が毒奏さく中りり同月廿五日左降の
 宣旨下り右口臣の職を削り從二位いりごとく太宰權師と
 文筑紫へ左遷不定め玉り寛平法皇此事を聞りり大かを
 ろるぬの御車めり玉を俄小御皆をさめ玉ひり清涼殿
 小立せ玉ひ斯とやせとわをありりとも左右の諸陣警固し事
 を通せども時平讒小味さる管根の朝臣がさくひとや
 法皇ハ草坐玉ひ終日庭上小御し晩小いりりむあり本院へ還
 玉りり○管神小御子二十三人ありせり御男子四人ハ四方へ流し玉ふ
 是も時平が毒舌小よさり姫さる都小さまり幼きふさり筑
 紫へさくさくつり年頃愛玉ひる梅ふさへ別ををりりなむひさ
 東風吹く白ひををせよ梅の花さるいと春さる志也此梅つりり

飛つる事ハ拳世の知る処あり又櫻を「桜花主を忘るぬものあり」云々
らん風ふさよつてふせよ」○斯く延喜元年辛酉二月朔日京の高辻の
御館をいひ玉ひて津の国須磨の浦小日に移しつゝ人抵りたまへり
中つとをいひてよりついでにひかりのひかりを管神の筆記
せまぬひつを須麻の日記を今も世のこころ一説は偽書といふ ○筑紫太宰府
みく「離家三四月 落涙百十行 万事皆如夢 時々仰彼蒼」
御哥小「夕ざさば野の山も立烟りるのびきうりこととをえまうりけし」
又酒の目「るの朝かゝる人もあひことおきとくぬと衣ひるより」もあま
ねまはねまの
ついでにひかりのひかり ○いふより玉ひて不出門行といひ詩を作り玉ひて
寸歩も門外へいひ玉ひて是朝廷を尊恐御身の謫官なるをつゝあま
たのめあり御向小「都府樓後看尾色 觀音寺只聽鐘声」
○管神延喜元年二月朔日都を出玉ひて筑紫へいり玉ひて八
月あり是より前の御詩文を管家文章といひ十二
卷左遷より後

のを管家後草とく一卷今も世につゞく後草小九月十三夜の題
ゆへ「去年今夜侍清涼」秋思詩篇獨斷腸 恩賜御衣今
在此 捧持毎日拜餘香」此御作小注ありその趣ハ○去年と
昌泰三年あり延喜元年
の一年ま其年の九月十三夜 清涼殿小時候あり
時秋思といふ題を玉ひて小詩の意小こととせし諫たてまつり小
其のさあを容玉ひよりとせむひて御衣を賜ひるを此配所小も
へりく毎日御衣小のとりたる餘香を拜と帝をまへ御恩哉
忘る玉ひる御心の誠を作り玉ひるあり此一詩をいふとも無
實の流罪小所し露をうりも帝を恨と玉ひるしを知るべし朝
廷を怨るひく魔道小入り雷公小あり玉ひるといふ妄説ハ次小
弁ぞ一○高辻の御庭の櫻枯るとき玉ひて「梅ハ飛櫻ハかろ
世の中小松をうりこととせしあうりけし」○さて太宰府小謫居ある事

三年三年一延喜三年正月の頃より 御心例ありて二月廿五日
 太宰府太宰府薨薨じ玉玉り御年五十九御墓御墓八府八府おちるおちる四四つ辻つ辻といふ所
 不定不定り 御棺御棺をいいづづる途途中中ふふとまりとまりてて別別その所その所不
 葬葬を奉奉る今の 神神齋齋是是あり。延喜五年八月十九日同所安樂寺
 小始小始く 菅神の神殿を建建らる味酒味酒の安行安行といふ人是是をうけ
 たりたり同九年同九年神殿成成る是よりさき四人の御子配流御子配流をゆるさき
 玉玉ひかひかの故故の位位ふかふかさき玉玉ふふの神神去去玉玉ひひのち水旱風雷水旱風雷の天
 震震ををくくありありる人の心安心安るる是是ぞ 菅公菅公の崇崇りりるるんんと
 風説風説ふふけけるとや。菅神薨薨去去より七年七年ふふありありて延喜九年
 四月左左口口臣藤原時平公薨薨じ歳三十九又一男八条の大將保忠保忠その
 弟中納言敦忠敦忠かかび時平時平の女女延喜帝延喜帝の孫孫の東宮東宮までも相相つつままて
 薨薨せらる又時平時平の諛諛毒毒不不荷荷贍贍志志る菅根菅根の朝臣朝臣ハ延喜八年十月
 死死ををここししりりの事事どもどもををも 菅神菅神の崇崇ありありとせせ不不流流布布せせららハ

菅公菅公の冤冤譴譴を世世の人哀哀戚戚きたるゆゑとや。延長元年三月保
 明太子明太子薨薨去去 時平の孫まふ 東宮東宮といひ是是 ○同年四月廿日贈位正二位本官の右口臣
 小復小復一玉一玉 神さりのひ 一条院一条院の御時正曆四年五月廿日
 菅神菅神小正位左口臣小正位左口臣を贈贈らる 菅神百年 御忌御忌ある。○同年閏十月十九日
 大政口臣大政口臣を贈贈らるらるとと此此 御神御神の御位御位ハ正一位大政口臣正一位大政口臣ととるるべべし
 後後年年屢屢 神神灵灵の赫赫きたる徴徴ありありふふよりよりて 天満宮天満宮 或
 自在天神自在天神の贈贈称称ありありててももく 醍醐天皇醍醐天皇ハ在位在位百廿代百廿代の御皇
 統統の中中ふふも珠珠小御徳達小御徳達といふゆゑ延喜延喜の聖代聖代と称称し御在位御在位の
 久久りりゆゆゑ 延喜帝延喜帝ともとも中中奉奉る 御若冠御若冠の時時ととるる賢賢者者
 の聞聞ええある重臣重臣の 菅公菅公を時平大臣時平大臣か一時一時の諛諛口口を信信し玉玉ひひて
 其實其實否否ををもも礼礼し玉玉ひひをを奉奉示示小菅公小菅公を左左遷遷ありありる御一代御一代の

失徳とやいふべきあるを 管神の恨と玉ひざりハ配所の詩哥小
 てもあつゝ 管神はうゝと玉ひざりとも賢徳忠臣の冤謫を天のい
 きどわりて水旱風雷の異変諺者奸人の死亡ありしらん俗子ハ是
 を管神の怨灵とさるハ是又管神の賢行ハ瑾つけありあれ
 ども竊小謂く賢者ハ旧悪をかりだとりあも事小こそよき冤謫
 慄愁のあまり諛言の首唱する時平大臣を肚中ハ深く恨と玉ひ
 しくもあつゝむ本編ハ小逃入村を神の忌玉と其徴とさるの
 一のるべしハ神去り玉ひよりサハ年の後延長八年六月廿六日
 大雷清涼殿ハ隕て藤原清貫大納言平稀世右中其外時候の人々
 雷火小即死延喜帝常寧殿ハ渡御ありて雷火を避たまふ
 是をも 管神の祟とさるハいよ非説ありと安齋先生伊勢の
 管像辨もりハ太宰府より一里西ハ天拜山あり 管神ハの

山ハのかりて朝廷を怨む告文を天ハ捧り祈り雷神とあり
 玉ひとりの賢徳の御心をあつゝ俗子の妄説を今ハ傳へた
 あり和漢三文面會ハ實ハ小記ハハ不出門行の御作ハ
 心を深めざるあやあんハ法性坊尊意叡山ハ在ハ一時 管神の
 幽灵來り我冤謫の夙懃を償とを願ハ師の道力をりて拒こと
 ろれ尊意曰平土ハ皆王民あり我ハ皇の詔をうけ玉ひとを
 避る小所あり 管神作色あり適拓禰を薦 管神嘯を吐
 焰をり玉ひとりの故事ハ元亨釈書の妄説ハ起此書ハ今天保
 廿年前元亨二年東福寺の虎関和尚の作ありか奇怪の事を記ハ佛者の筆癖ありと安
 齋先生もりハ白太夫とりの伊勢渡會の神職 管神文墨ハ於
 格外の懇友ありゆゑハ北野ハ祀り今社あり 此御神の事を作
 松王櫻丸の名ハかの梅ハ飛の御哥ハ りハ俗曲ハ梅王
 北野の御社の始ハ天慶五年六月九日より
 よりてまうけする名あり

勅命ふよりく建創其起り西の京七條小住する文子とのみ女小神
 詫ありしふよりくあり 北野縁起 ○世小渡唐の天神とらひて唐服小
 梅花一枝を持玉ふを画く故事ハ佛鑑禪師 聖一國師とあり名を東福寺の崩山國師号の始祖
 博多小住玉ひする跡の地中より掘いごとく石小菅神の灵唐
 土(渡り玉ひて經山寺の無準禪師小 聖一國師の師あり 法を受玉ひて日本へ
 歸り玉ひると件の石小彫つけありと古書小見えたるを拠とくと
 渡唐の 神影を画き傳へるあり此事固妄説ありと安齋先生の
 菅像辨ふり 菅家聖唐傳曆といふ書の附録小沙門師嵩が ○菅神
 左遷の實跡を載するハ日本紀畧 抄録小卷序の扶桑畧記 卷三〇日本史
 百の列傳九十五〇菅家御傳記 神統菅原陳經朝臣御作 其餘虛實混合し
 たる古今の書籍故拳 正史小よりこれバ証とせ ○本朝文粹小拳たる大江國衡の
 文小「天満自在天神或ハ塩梅於天下輔導一人 帝の御 或日月於天

上照臨萬民就中文道之大祖風月之本主也 云云大江家ハ
 菅原家と俱小朝廷小累世たる儒臣ありたる小菅神を崇
 稱する事件の文の如く是以凡文道小関者此 御神を崇あがぎ
 んや信ぜざらんや○およそ 菅神を祀る社小ありて雷除の護
 府といふ物あり此 御神雷の浮名をうけ玉ひするゆゑ 神しん灵雷
 を忌玉ふゆゑ小此まゝありたるを驗あるごとく ○さて如件條説するハ
 本編小しりし逃入村の 神しん灵の事小因ゆゑ實跡の書とを摘要し
 て御神の畧傳を見曹小示せあり固こ小学のまをみるまま要跡の
 漏るも説の誤謬たるもあざあざと謹つと心附記を ○再按る小
 孔子の聖なるもその灵ハ生る時よりも照然とくとその墓十里
 荆棘を生せども鳥も巢をむままが關羽の賢なるも死して小神と
 ありと祈小應を是則生ハ形を以て運り死て小神を以て運る



七ツ釜之図

ありき今その所をなむいひごきと

○又尾張の名古屋の人吉田重房が著しつる筑紫記行巻の
九小但馬國多氣郡納屋村より川舩より但馬の温泉小抵る途
中を記しつる條小曰。猶舟小のりつ行。右の方小愛宕山宮島村
野上村石山地名。あつ追續つあり此石山の川岸小臨する所小奇しき
石あり其形ち磨盤の如く上下平ふしつ周ハ三角四角五角八角
等小く石土の切草。如く色ハ青黒し是を掘出しつる跡もありて
洞のこらつ天下の廣きよハ珍奇ある事ありきものありけりま

是も奇石の類あるが筆の次小ありつ

北越雪譜二編卷之三

